

「車輪の下で」を読む

奈良 敏行



七月九日(二〇二四)の読書会は課題本がヘッセの『車輪の下で』だった。

読書会での自己紹介では、「学び直し」をしていますというのが常だった。何を学び直すそうとしているのだろうか。

主人公ハンス・ギーベンラートの父は仲買人。俗物そのものと説明される。ハンスを見守る大人が二人。フライクという靴屋の親方。ちっぽけな職人だが信仰深く村々で伝道説教もする、でも暮らしは平凡。もう一人の助言者の牧師は雄弁な説教者で熱心な学者、新しい解釈の信仰に生きる。この二人には溝がある。ハンスは新しきに惹かれる。

ハンスは郷土で二番の成績で神学校へ進む。平凡な家庭

から生まれたエリートなのだ。意気揚々と入学しトップで卒業しようと野心を抱く。しかしヘルマン・ハイルナーという上流家庭出身の同級生と親しくなることで運命が変わる。

「車輪」という単語は、有為転変を意味するらしい。人間を押しつぶす運命の車輪。下敷きになったところで終わる運命もあるし、そうでない運命もある。親友のハイルナーは詩人で上昇志向を持たない。すでに上流家庭に所属するからだ。上昇でなく詩人として「車輪」の外部へ出たいだけだ。ハンスは車輪の頂点に立ちたい。しかし詩人ハイルナーの奇行に巻き込まれ、学業をつづけられなくなる。この雑多な階級のるつぼの神学校で自分の目的を見失ってしまう。

この神学校はエリート養成校なのだ。エリートとは何だろう。「学校の使命は、上から認められた基本方針に従って人間を社会の有用な一員とし、彼のなかにある特性を目覚めさせることにある」。特性とはなにか。「ラテン語や計算のできるよき小市民へ育つことだ。上流階級出身のハイルナーはそんな未来に興味はなかった。彼にとつての良い事は「学校の使命」の外部にあるものだった。ともに外部へはみ出すハイルナーとハンスの二人だが、運命は異なる。

ハイルナーには簡潔な後日談がある。

《この情熱的な少年はやがて、たくさんの天才的ないたずらや奇行をくりかえした後で、人生の苦しみによって試験を与えられ、英雄とまではいわないまでも、率直で立派な男になった》

ハンスはひたすら学んで優秀な成績を収めた。しかしその「学び」は入学試験のための学びであって、生活とはまったく切り離されたものだった。全集中の学びだ。ハイルナーはそうではない。多様な学びの中の一つに入学試験という課目があっただけだ。

ハンスは学びを捨てて帰省する。凡庸な父親はそれでも何一つ責めることはない。愛しているのだ。優しい言葉をなげかける。

《ハンス、お前は機械工になりたいかね。それとも書記がいいかね?》

じつはハンスも凡庸なのだ。何一つ迷うことなく機械工を選ぶ。幼なじみのアウグストが見習工となっていたからだ。友人のアウグストに二年遅れて職人の世界に入っていく。それがその町の大多数のけして悪くない人生だ。車輪の下には職人階級のそれなりに豊かな生活があった。反学校物語『ハマータウンの野郎ども』の若者たちの群像が甦る。車輪の頂点をめざしていたハンスは、いとも簡単に

車輪の下の仕事を選ぶ。ハンスはそれでも幸せだった。

《損なわれてしまった魂は、しばしば人生のはじめの春のような時期、予感に満ちた子ども時代に戻ってゆく。》

ハンスはじつは学問よりも自然の中での釣りが好きなのだった。一瞬「永遠」に手が触れながらも、幼い頃からの家庭の文化に接ぎ木できたハイルナーとはちがひ、何者にもなれなかったハンスという若者の物語がここにある。

青年期の作者ヘッセもこの車輪の下で生きた。神学校を退学し、機械工や書店員になった。十八歳テュービンゲンヘッケンハウアー書店で三年の見習いをつとめやがて本格的な職人となる。この書店はヘッセの学び直しの場でもあった。優秀な先輩に導かれ、やがて詩人として花開く。

わたしは何を学び直そうとするのだろうか。書店人のときには読者という共通理解の人々に囲まれていた。職人としてそれはそれで楽しい世界だった。しかし本を届けるといふ役割が終わったとき、「人生の初めの春のような時期」に戻っていくのを感じる。その頃の豊かな「予感」、そこから学び直して行こうと考える。他人に届ける本でなく、自分に届ける本の豊かな世界をもう一度訪ねてみたい。車輪の外で。

2024.7.12